

433 Candida albicans の膈上皮細胞に対する付着に関する検討

広島大*, 国立呉病院**

村上朋弘*, 三好博史*, 中原恭子*, 松尾光将*,
正岡 亨*, 内藤博之**, 占部 武**, 藤原 篤*

【目的】感染の成立には、その第一段階として微生物の宿主細胞への付着が心要不可欠であり、続いて増殖、侵入の過程をとり発症すると考えられている。そこで膈カンジタ症の発症要因を解明するため、Candida albicans (以下 C.albicans) の膈内での陽性率及び症状発現率と C.albicans の膈上皮細胞に対する付着率との関係、さらに糖の付着率への影響について検討を行なった。【方法】1) 410名について、MINITEK (BBL) を用いて真菌の同定を行なった。2) 付着実験は、C.albicans の IFO-1385 株を用いて、菌と膈上皮細胞をリン酸緩衝液 (以下 PBS) 中で接触させ、上皮 100 細胞に付着した菌数を算定し、付着率を求めた。3) さらに PBS に糖を加え、付着の阻害実験を行なった。【成績】1) C.albicans の陽性率は全体で 14.2% で、対象別に検討してみると妊婦群 17.2%、非妊婦群 (正常成熟婦人群) 17.0%、閉経婦人群 7.4%、産褥婦人群は 0% であった。2) C.albicans の付着率は、非妊婦群より妊婦群でやや高く、産褥婦人群や閉経婦人群ではさらに高い傾向が認められた。非妊婦群の性周期別の検討では、付着率と smear index 及び eosinophilic index とは負の相関があり、妊婦群においては妊娠後期に付着率は高かった。3) gulcosamine 及び galactosamine の添加により付着は有意に阻害された。【結論】1) 非妊婦群、妊婦群において、付着率は陽性率、症状発現率とよく一致した。2) 排卵期は付着率は低くなり、膈カンジタ症の発症が少ないことが示唆された。3) 膈上皮細胞に対する C.albicans の付着には gulcosamine 及び galactosamine に感受性をもつ特異的な付着因子が関与していることが推測された。

434 子宮頸部および膈壁の HPV 感染症に対する Interferon α の治療効果 —組織・細胞学的ならびに DNA copy 数による判定—

大阪市大, 北堀江病院*

中村哲生, 松本義隆, 田村一富, 山片重房,
須川 佑, 田村明敏*

〔目的〕子宮頸部および膈壁の human papilloma virus (HPV) 感染症に対して interferon α (INF) による治療を試み、その治療効果を形態学的ならびに HPV-DNA の copy 数の変化に基づいて検討した。〔方法〕細胞診、組織診にて異角化細胞、空洞化細胞など、condylomatous change を呈し、かつ DNA hybridization 法にて HPV-DNA が確認された 32 症例に対し、INF $3 \sim 6 \times 10^6$ IU を condyloma acuminatum 直下の粘膜下 (膈壁病巣)、もしくは子宮頸部の 8 ポイント (flat condyloma) にコルポスコピー下に局所注射した。注射は隔日に計 10 回施行し、治療前後の組織・細胞の変化と、HPV-DNA の copy 数の変化を調べた。DNA 検索のためには、病巣外の細胞の混入を避けるべく特製の brush を用いて目的細胞を採取し、nylon membrane 上で、 $[^{32}\text{P}]$ にて標識した HPV-DNA (A) およびヒト胎盤 DNA (B) を probe として dot blot hybridization を行った。各 dot の放射活性を液体 scintillation counter にて測定し、cpm (A)/cpm (B) の値を求め、標準曲線より 1 細胞あたりの HPV-DNA の copy 数を算定した。

〔成績〕①形態学的に効果の認められた 16 症例中 5 例 (31%) に DNA 診断により virus DNA の遺残が確認された。②治療症例の大部分で HPV-DNA の copy 数の低下が観察されたが、形態学的変化が消失しない症例では、全例 HPV-DNA が治療後も検出された。

〔結論〕① HPV 感染に対する INF 療法の一次効果が認められたが、治療効果を上げるためには投与回数を増やす必要がある。②本症の治療後の再発の原因として、再感染の可能性とともに遺残 virus の再燃も考慮しなければならない。